2020年(令和2年)

第155号

(11月1日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発 行 所:立正佼成会 京都教会 発行責任者:涉外部長 田中規之 編集委員長:涉外広報 植田恭司 〒605-0041 京都市東山区三条東町230

TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

開祖さま入寂会 ~庭野開祖の生きざまを倣っていきたい~

開祖さま入寂会が10月4日、本部大聖堂で行われ、京都教会の会員は各家においてYouTube配信を拝見しました。教会法座席ではソーシャルディスタンスを確保しながら、スクリーンに映写された映像により約50名の会員が参拝しました。





式典は庭野光祥次代会長導師による読経供養、佐藤 益弘教団常務理事の体験説法のあと、庭野会長のご法 話と続きました。

佐藤常務理事は庭野開祖と庭野会長の秘書時代に先輩から温かく指導してもらった事や「秘書という尊いお役を頂けたのは、先祖のお徳以外の何ものでもないんだよ」と、当時の波木井山圓実寺の岩田ご上人からお言葉を頂き、ともすれば卑屈になる自分の気持ちを切り替えることができたことを述懐しました。

庭野開祖と松緑神道大和山教団へ同行した際などに も、開祖のお姿からどんなことがあっても読経供養を 優先することの大切さを学び、こうした経験が教会長 時代に役に立ったと振り返りました。

庭野会長はご法話の冒頭に、朝の一乗宝塔での開扉式にふれ、ヤモリ5匹も宝塔を守ってくれていたと報告しました。「考」の文字について解説し、「考える」「成す」「亡くなった父」の3つの意味があると述べ、父のことを「先考」とも言うと紹介しました。

また、儒教の言葉から「朝(あした)に道を聞かば タベに死すとも可なり」を引用し、求道者として充実 した 1 日 1 日を送る姿勢を述べ、開祖さまに倣い朗ら かにおおらかになっていきたいと締めくくりました。

配信終了後、中村教会長はお言葉の中で庭野会長のご法話の中から「朝聞夕改(ちょうもんせきかい)」という言葉にふれ、「朝に道を聞いたのであれば、そして気付いたのであれば、直ちに改める。今夕から改める」ことと述べ、気付いた時に改めていくことの大切さを教えて頂いたとかみしめました。

また庭野開祖のお陰で法華経に出会えたことから、「半沢直樹じゃないが、このご恩を『十倍返し』でお返ししていきたい」と話すと法座席からは笑いがこぼれました。最後に庭野開祖の生きざまを私たちが倣っていきたいと精進を促し、結びました。

と共に歌いました。[理…りと、学生時代] をお よりも、 軍縮を訴えました。 にお この ま危 く世界は核兵器 黎明に、 り約 険 いて核兵器廃絶・完全 か な す <が発効で、来年一 国連軍縮特別 したの \mathcal{O} 近はすっか 本会の庭野開 玉 二国 たいものです。 まで を呼 ろ平和の です 武 Οが (Aか年動 設装する Rけに n が ま M る 核

今月のことば ~「ありがたい」といえる幸せ~ 京南支部主任 関谷委子

谷です。よろしくお願いします。

私の地区の組長さんが、この夏、お亡くなりになり ました。2 年前に発病し、一時良くなったものの、1 年前から急に悪化していました。

まもなく彼女は要介護状態になり、ご主人一人で介 護されていました。私も介護の経験があり、彼女の病 状の不安とご主人の生活が心配で、「私も何か助けにな ることがしたい」と思い、おかずを持って時々様子を 伺いに行っていました。

ご主人はいつもニコニコして大変なことや奥さんの 様子を聞かせて下さり、ご夫婦の絆の強さやお二人が 今の状態を受け入れ自然体でおられること、またコロ ナのお陰さまで、ご主人は仕事が休みになり、ずっと 彼女についていて下さり、彼女がどんなに心強くして いるかと思え、ご主人の笑顔に私も救われていました。

彼女が亡くなり、佼成葬の申し出があり、葬儀から 四十九日まで支部でさせて頂きました。葬儀では教会

11 月の言葉を担当させて頂きます、京南支部の関 長さんはじめ、皆さんにお世話になりました。

7日ごとのご供養のお役で来られた方々と彼女を偲 びご主人と話しが出来、皆さんお役のありがたさをか みしめて下さいました。

彼女が亡くなったことは本当に悲しくて、淋しいこ とですが、彼女を通してご主人とご縁を頂き、明るく、 力強く生きる姿に私達が勇気を頂きました。

このことを通して、当たり前と思っている家族や身 近な日常が当たり前でないこと、また、その中に仏さ まのはからいを感じ、私の心を暖かくして頂きました。 ご主人の笑顔が展転したのでしょうか。

今月の会長先生のおことばに「ありがたい」と感謝 することで大自然と調和が出来、「みんなと仲良くでき るのです」とありました。

自分が大安心になるだけでなく、大自然の調和にま で及ぶことを学び、ひとつひとつを大切に生きなけれ ばと思いました。ありがとうございました。

合堂

京都市自治記念式典 ~新型コロナウイルス感染症対策支え合い特別表彰に受賞~

令和2年度京都市自治記念式典が10月15日、左 京区岡崎のロームシアター京都で開催されました。



今回は市政の推進に尽力された方々が門川大作市長 から表彰状を授与されるとともに、コロナ禍で亡くな られた、故・立石義雄氏に京都市市民栄誉賞の称号を 贈り、表彰されるものです。

また、金員や物品等の寄付を通じて新型コロナウイ ルス感染症対策に貢献された方を称え、「新型コロナウ イルス感染症対策支え合い特別表彰」として表彰され、 京都教会も3名が参加しました。

418件の個人・団体数で、当日会場に来られなかっ た個人・団体を合わせると 1,556 件にものぼり、代 表者が舞台上に登壇し表彰を受けました。

京都教会では5月の青年の日の活動を通して、会員 手作りの防護ガウンを京都市立病院に寄贈したこと が、今回の表彰に結びつきました。

近畿支教区メディア布教委員会 ~Zoom にて開催~

新型コロナウイルス感染拡大防止のため今年2回の 大阪普門館での開催が中止になった近畿支教区メディ ア布教委員会でしたが、10月25日にテレビ会議を 開催し、近畿 11 教会のうち 10 教会 13 名が、京都 教会からも2名が参加しました。また本部伝道メディ ア課や佼成出版社からも参加がありました。

9月に有志で行ったばかりで、各教会の1ヶ月間の りました。

コロナ禍で会員が集いにくい中、LINE グループや

Zoom を活用したオンライン形式の有効性や弊害が話 し合われ、スマホやパソコンを使ったデジタルの手法 と対面によるアナログの部分とを併用したハイブリッ ドで、会員が取り残されないようにすることが課題点 として挙げられました。

また京都教会の「平安月報」が佼成新聞に掲載され たことにもふれ、新聞は会員専用の機関紙であり、佼 報告と伝道メディア課から情報提供やアドバイスがあ、成デジタル版は不特定多数が見られるため、記事の書 き方を変えているとの説明があり、各委員は関心を示 していました。

戦後 75年 当時を知る会員さんに語って頂きました

私の戦争体験 ~伏見支部 岩崎りえさん 82歳~

がおり、5人姉弟の2番目です。3歳のときに太平洋 戦争が始まったのですが、ほとんど記憶はなく、小学 1年生で終戦を迎えました。小学校に入る時、ランド セルはなく、母が竹で編んでくれた「かご」のような ものがランドセル代わりです。

父は海軍の工廠(軍需工場)に勤めており、家は下宿 屋をしていたため、兵隊さんが来られていました。そ の兵隊さんが食べ物を持ってきてくれることもあり、 戦時下で食べ物がないというものの、私たちはマシな ほうだったと思います。

船に乗っている兵隊さんが実家が沖ノ島かどこか で、雑魚を頂いた覚えがあります。さすがに虫を食べ たことはありませんでしたが、雑炊のお店では行列が 出来ていましたが、中身は汁ばっかり。今日はシジミ が入っていると思ったら自分の「目玉」が映っていた という話をよく聞きました。畑ではサツマイモなどを 作っていて、イモのツルまで食べていました。

当時の暮らしは、部屋の明かりは外にもれたらいけ ないということで、電灯の周りに黒い布で傘のような ものをかぶせていました。女の人は着物を作務衣にし、 それを決戦服と言って、胸に名前と血液型を縫ってい たものです。町内では大人は竹やりで本土決戦の訓練 をしていたり、焼夷弾が落ちた時の消火作業を傍で見 ていたこともあります。夏も防空頭巾をかぶって警戒 警報の際は避難していました。

戦後、海外にいた約 660 万人の日本人の引き揚げ は、昭和20年(1945年)9月、米軍管区から開始 されました。オーストラリア軍管区、イギリス軍管区、 中国軍管区からの引き揚げも、昭和 22 年中にほぼ終 了。ソ連軍管区からの引き揚げは、昭和 21 年 12 月 から始まりましたが、容易には進展しませんでした。 国内各地に引揚港が設けられましたが、昭和 25 年以 降は舞鶴港が国内唯一の引揚港となり、昭和33年の 記事は「舞鶴引揚記念館」より抜粋 終了までに、延べ346隻の引揚船と約66万人の引

防空壕は家の中にありましたので、空襲警報が鳴れ ばそこに隠れるわけです。ですから、昼夜安心して寝 られなかった思い出があります。

「欲しがりません勝つまでは」が標語。金目のもの は国に寄付していました。それらが戦争の部品に代わ ります。出さないと非国民扱いされましたので、お寺 の鐘も出されました。またお風呂屋さんに行くとシラ ミやノミがうつることが多く、服もいいものを着てい くと取られることもたびたびでした。

終戦の天皇陛下の放送は聞いていましたが、7歳だ ったので何を言っておられるのか分からず、後から日 本が負けたと教えてもらいました。

終戦後、舞鶴には引き揚げ船が着きました。「岸壁の 母」の歌は舞鶴のことです。遺骨も戻ってきて、私が 中学生になってから「葬送行進曲」に合わせ、生徒300 名以上で一柱ずつ東舞鶴駅まで、白布に包み胸に抱い て歩いたり、マラリアの患者も引き上げてこられ、真 夏でも毛布をかぶって寒い寒いと言っておられたこと が印象的でした。

今から思えば、こちらには食べるものもない、でも 米軍は立派な飛行機でやってくる。これで本当に勝て るのかなと思っていても口に出してはダメな時代。自 由な言動が許されない時代でした。

あの頃の不自由な生活があるから、多少のことがあ っても我慢が出来るようになったと思いますが、二度 とあのような戦争だけはやってはいけません。

揚者を受け入れました。



写真は 引揚船「興安丸」

https://m-hikiage-museum.jp/about-us.html

※「私の戦争体験」は一旦終了します。今後も皆さんの戦争体験をお聞かせ下さい。

日常生活の中の仏教用語 ~えっ?こんな言葉も仏教が語源?~

言葉のルーツを知って仏教に親しみを持ちましょう。

【頭陀袋(ずだぶくろ)】

何でも入るような、大きなだぶだぶの袋のこと。

「頭陀」はサンスクリット語の「ドゥータ」を音訳し 住にかかわる欲望を捨てる修行を「頭陀」あるいは「頭ろう。 陀行」といった。この修行は、乞食をしながら野宿の

旅を続ける。このときにお経や衣などを入れ、首から 下げていた袋が頭陀袋である。

死んだ人を葬るときに首からかける袋のことも、頭 たもの。本来は「捨て去る」の意で、仏教では、衣食 陀袋という。あの世への旅を頭陀行になぞらえたのだ

(「仏教早わかり百科~主婦と生活社~」から抜粋)

庭野日敬開祖法話集 ~開祖随感より~

「ご恩報じ」

八十八歳(1994 年当時)の誕生日を全国の会員のみなさんに祝っていただいて、私がなによりもうれしかったのは、みなさんが現在の幸せを報告してくださる、その喜びの笑顔でした。人さまの喜びのお手伝いができる幸せを、あらためてかみしめさせていただきました。

私の生まれ故郷は、一年の半年近く三メートルもの 豪雪に埋もれてしまうのですが、その雪の下で、村の 人たちは助け合って暮らしていました。私の家は十二 人もの大家族でしたが、ついぞ、いがみ合うといった ことはありませんでした。小学校に入ると、校長先生 が神仏を拝む大切さを教えてくださいました。そして、 ご法を通して出会うことができた数えきれない方々の ご恩によって、今日の私があります。

「自分の受けた恩を一つ一つ数え上げたら、お返しできたことのあまりの少なさを思わずにいられない」とおっしゃる方がおられます。山のようなご恩をいただいて生かされてきたこの命を、一日も長く生きて、ご恩報じをしなくてはと思う一日一日です。

「無言の手本」

私の祖父は畑仕事で忙しいときも、村で病気などで苦しんでいる人がいると、その助けに飛び回ったものです。もちろん無料奉仕です。その祖父の姿を見て、私は子どもなりに疑問を持ったことがありました。

私の家はとりわけ裕福だったわけではありませんから、家のことをほったらかして人のことにかまけていていいものか、と思ったのです。ところが病気やけがを治してもらった人たちが、田畑の仕事が一段落すると畑で穫れた作物を持ってお礼にくるのです。そのうれしそうな姿を見て、私もだんだんに人さまのためになるということはなんと気持ちがよいものか、と心に

植えつけられていったように思うのです。

世の中にはいろいろな喜びがありますが、とりわけ 人さまに尽くす喜びが最高であることを実際に学ぶ機 会は、少ないのではないでしょうか。

とりわけ、いまの子どもたちは、そうした機会に恵まれていないと思うのです。そういう意味で私はあらためて祖父に感謝せずにいられないのですが、どんな時代であっても、親は口先だけでなく身をもって子どもにお手本を示すことが大事だと思うのです。

「命を頂く感謝」

「衣食足りて礼節を知る」という言葉がありますが、 現在の日本の状態は、ぜいたくに慣れきって、足りれ ば足りるほど逆に礼節を忘れ、道義心がすたれる一方 のように思うのです。

かつては、どこの家庭でも「米粒一つでも粗末にするとバチが当たる」と教えたものです。それは、ただ倹約のためだけではなく、仏教でいう不殺生(ふせっしょう)の考え方、あらゆるものの命を大切にすることを教えていたのです。

食事をするときに「いただきます」と合掌するのは、 お米を作ってくれた農家の方や、魚を獲(と)ってくれた漁業の方たちへの感謝にとどまらず、「米よ、野菜 よ、魚よ、私の命をつなぐためにあなた方の命を頂戴 (ちょうだい)させていただきます。ありがとうございます。どうか成仏してください」という感謝と供養 の心を込めた礼拝なのです。

私たちがいただくお米の一粒は、もみ種として田にまかれれば何百粒もの実をみのらせます。その命を私たちはいただいているのです。この「もったいない」という気持ちこそ、日本の心だったと思うのです。現代には現代の生き方があるでしょうが、「もったいない」という感謝の心は忘れてはなりません。(つづく)

11~12月の主な教会行事

9:00~ 11月1日(日) 朔日参り(Web 配信) 9:00~ 開祖さまご命日(Web 配信) 4日(日) 9:00~ 脇祖さまご命日(Web 配信) 10日(土) 9:00~ 開祖さま生誕会・ 15日(木) 釈迦牟尼仏ご命日 (Web 配信) 12月1日(火) 9:00~ 朔日参り(Web 配信) 9:00~ 4日(金) 開祖さまご命日(Web 配信) 8日(火) 9:00~ 成道会(Web 配信) 10日(木) 9:00~ 脇祖さまご命日(Web 配信) 釈迦牟尼仏ご命日 9:00~ 15日(火) (Web 配信)

●メッセージ

9 月は脇祖さま報恩会、10 月は開祖さま入寂会、そして 11 月は開祖さま生誕会で、私たち会員にとって感謝の3ヶ月の締めくくりになります。脇祖さまがご遷化されて 63 年、開祖さまがご入寂されて 21 年も経ちます。ご供養でご法号を読み上げさせて頂くたびに、霊界から見守って頂いているような気持ちになります。「来臨影向知見照覧」とは「どうぞこの場においで下さり、この場を荘厳にして下さい。そして私たちのゆるぎない信仰への真心をお見通し下さい」ですね。両祖の教えを実践させて頂いたお陰さまで、毎日を感謝で過ごすことが出来ていますと胸をはって言える会員でありたいと思います。